開講大学：大谷大学　　**科目名：「フィールドワーク特殊演習（PBL）」**　　**チーム名**

連携先ミュージアム：　京都市京セラ美術館
京都市京セラ美術館をプロデュースする

美術館の基本的な運営方法、京都市京セラ美術館の歴史や現状を理解したうえで、京都市京セラ美術館の魅力・価値を高める企画立案・提案を行う。

■受講生（50音順）

浦辻 颯太（京都産業大学・経営学部・3年生）
古賀 彩華（大谷大学・文学部・3年生）
下口 ひとみ（大谷大学・文学部・2年生）
棚橋 萌々恵（大谷大学・社会学部・1年生）
蛭谷 知世（大谷大学・文学部・3年生）
福山 佳歩（大谷大学・文学部・4年生）
堀野 薫（大谷大学・文学部・3年生）
松村 隆平（大谷大学・文学部・2年生）
水中 愛子（大谷大学・社会学部・1年生）
村瀬 一輝（大谷大学・文学部・4年生）
河口 紗椰（大谷大学・文学部・1年生）
清水 愛結（大谷大学・文学部・2年生）
高田 果鈴（京都芸術大学・芸術学部・3年生）
長野 澪也（大谷大学・文学部・3年生）
福嶋 つなみ（大谷大学・文学部・3年生）
渕川 蒼太（大谷大学・文学部・1年生）
前山 未来（大谷大学・文学部・3年生）
三木 愛美（大谷大学・文学部・1年生）
村川 愛里彩（京都産業大学・現代社会学部・3年生）
ﾓﾝﾊﾟﾙｺﾞﾝｻﾞﾚｽ 瑛真（龍谷大学・文学部・3年生）

■担当教員　　宮﨑　健司（大谷大学・文学部・教授）

活動目的・概要

「京都市京セラ美術館をプロデュースする」というテーマのもと、2020年にリニューアルオープンした京都市京セラ美術館の入館者をさらに増やすため、美術館の魅力や価値をより高められるような企画を、3グループに分かれて議論、検討しました。京都市京セラ美術館では、3回のフィールドワークを行いました。フィールドワークでは、ラーニング担当の方から館に関するレクチャーを受けたほか、館内の案内もしていただき、美術館の現状や歴史、リニューアルの狙いや課題等についての話しなどを伺いました。それをもとに、各グループにわかれて美術館の魅力向上、発信をテーマに企画を検討し、発表の準備を進めてきました。

3年目になりますが、引き続く新型コロナウイルス感染症の影響で思うように授業計画が進まず、また、グループのメンバー全員で集まって議論する機会も思うようにとれず、議論を行ううえで意思疎通を図ることに苦労しました。そのため、授業やグループ内での企画検討においては、オンラインツールを活用し取り組みました。

◆主な活動

2022. 4.13　ガイダンス
2022. 5.11　ミュージアムとは
2022. 6. 8　京都市京セラ美術館を知る
2022. 6.11　京都市京セラ美術館を知る（FW①）
　ガイダンス・館概要レクチャー
　コレクションルーム見学・館内巡回
2022. 6.29　京都市京セラ美術館を考える①
2022. 7.13　京都市京セラ美術館を考える②
2022. 9.10　京都市京セラ美術館を考える（FW②）
　ディスカッション
2022. 9.14　京都市京セラ美術館を企画する①
2022. 9.21　京都市京セラ美術館を企画する②
2022.10.12　京都市京セラ美術館を企画する③
2022.10.26　京都市京セラ美術館の企画を精査する
2022.11. 9　京都市京セラ美術館に提案する
2022.11.12　京都市京セラ美術館に提案する（FW③）
　企画案の発表・ディスカッション
2022.11.30　成果報告の最終調整
2022.12. 7　成果報告を完成する
2022.12.11　成果発表会
2022.12.21　まとめ

活動の成果

0. コレクションルーム（館蔵品展示）の活性化

「企画展と比較してコレクションルームの来場が少ない」を解決したいと考えました。
　コレクションルームは、美術館の特色がもっとも表現できる場所、その魅力を発信したい。来場者を増加させ、継続的な集客を目指すことで、**市民参加の推進・美術館の活性化を図り、市民がより豊かに学べる生涯学習施設としての京都市京セラ美術館を目指す。**その実現のために３つの企画を提案します。

1. 美術館（作家）×こども　（担当：村瀬、蛭谷、前山、ﾓﾝﾊﾟﾙｺﾞﾝｻﾞﾚｽ、河口、三木）

作家とこどもにアプローチ「ザ・トライアアングル」を発展！
　「ザ・トライアングル」を活用して、「美術館（作家）×こども」をテーマにワークショップを開催します。
　「ザ・トライアングル」は、作家・美術館・鑑賞者を結ぶ場所としてイベント開催中ですが、より充実させるため、美術館側が作家に依頼し、子供が主体になる制作体験プログラムを作成します。のちに作家は自由に作品を展示し、関連イベントとして体験プログラムを開催できるようにします。
　この活動を通して若手作家をサポートとするとともに、将来の美術館のファンを育成します。

2. 美術館×大学生　（担当：福山、高田、長野、堀野、清水、渕川、水中）

「ぽよよんタイム」の拡充版「ぽよよんウィーク」！
　「美術館×大学」をテーマに京都の大学生と連携したイベントを開催します。
　現在、「ぽよよんタイム」という教育普及事業が実施されています。「ぽよよんタイム」とは、展示鑑賞後に来館者が職員との会話を通して、感想や疑問を共有することができる取り組みです。
　これをさらに拡充したものを「ぽよよんウィーク」と設定します。職員に加えて大学生スタッフをコレクションルーム展示室内に配置し、展示室内のスタッフと作品を鑑賞しながら会話できる空間をつくることで、美術館での時間をより充実したものにすることを目的とします。

3. 美術館×市民　（担当：古賀、浦辻、福嶋、村川、下口、松村、棚橋）

市民がつくる美術館！
　「美術館×市民」をテーマに市民ボランティア団体を設立します。
　市民ボランティアの活動内容は、講座やセミナーの学芸員の補助や書類整理などの雑務、美術館の概要や役割の説明を行う施設案内など幅広いものです。
　年齢を問わず募集を行うことで、様々な年齢層の地域住民の視点を取り入れることができます。市民参加に最も近い活動であり、市民のニーズの把握などが可能になります。これにより、市民からの館全体の使用方法について自発的な提案を行う場所がうまれます。美術館と市民の結びつきが強くなり、美術館の運営をより良いものにすることができると考えました。

4. 連携支援母体（コーディネーター）の設立

企画の課題を解決し、実現するために！

美術館と他者をスムーズにつなぎ、コーディネートする「連携支援母体」の設立を提案します。
3企画を実現するには、美術館とごども・大学生・市民を円滑につなぐ存在が必要です。

1.「美術館（作家）×子ども」：作家への連絡・スケジュール調整、子どもへの広報が必要です。
名古屋市教育委員会の取り組み「美術をたのしむプログラム」では、作品を塗り絵にして、子どもが自由に発想して色を塗ることで、子どもたちが美術と親しむきっかけを提供しています。この教育委員会に代わる存在が連携支援母体です。

2.「美術館×大学生」:「ぽよよんウィーク」の参加要項、参加者の決定、大学生・大学への広報が必要です。
名古屋市博物館と名古屋市立大学による「MARO」にも、若者を呼び込むという目標、イベントの企画・運営の取り組みといった活動を行っています。しかし、MAROはあくまで名古屋市立大学の部活の1つという立ち位置にあり、今回、私たちが提案する連携支援母体は組織として確立させたいと考えています。

3.「美術館×市民」：市民ボランティアの募集要項、参加者の決定が必要です。
前例として「京都市文化ボランティア」があげられます。京都市文化ボランティアは、文化芸術活動をサポートしたい人が登録し、サポートを必要としている人が依頼をすることで、京都市が仲介者としてボランティア派遣を行っています。京都市京セラ美術館も京都市文化ボランティアを活用していますが、参加する市民ボランティアが求めるものと活動内容が合致しているとは限らない現実があります。「連携支援母体」の設立によって、ボランティアのニーズをていねいにすくいとり、より有効な内容となるのではないでしょうか。
連携支援母体の設立によって、多くの企画が実現できれば、美術館は自由でさまざまな文化芸術活動が行いうる場所を提供し、市民は自らの行ってみたいことを実現できる美術館を創ることができると考えます。

さまざまな企画を実施する時、経費と人員が問題になりますが、とりわけ大きいのは人員の問題で、実際には館と外部との調整が大きな課題といえます。今回、提案した連携支援母体（コーディネーター）の設立は、その課題を解消するものと言えます。この課題とその解消方法は、京都市京セラ美術館1館にとどまることはなく、博物館・美術館・資料館・動物園など生涯学習施設すべてに有効な内容ではないかと考えます。つまり、例えば、京都市京セラ美術館で実践ができるとすると、京都から全国へ生涯学習施設の新しいあり方を提案するものとも言えます。

以上のように、連携支援母体を設立して3つの企画を実行することが、「京都市京セラ美術館をプロデュースする」というテーマに対する大谷大学の提案です。

大谷大学のアプローチ

連携支援母体の設立

↓

美術館（作家）×こども　美術館×大学生　美術館×市民

活動を振り返って

（学生の感想）

【A班】

・限られた時間の中で、「京都市京セラ美術館」をプロデュースするという目的からはずれないように考えて行くことに苦労しました。
・同じ班内でも認識の共有が上手くいかない部分もあり、互いの意見をまとめることができたか、不安が残る結果になりました。
・作業の負担が特定の班員に偏ってしまうことがあり、もう少し上手く分担できれば良かったのではないかと思います。

【B班】

・班員がお互いに課題についてどこに重きを置いているのかを共有し、その上で、全体の意見を擦り合わせていくことに苦労しました。
・個人で作業分担する時間が多く、グループ全体としての討議時間がが少なかったため、班としても意見を完成度の高い状態で確立できたか、不安の残る結果となりました。また、他の班への共有等がスムーズに行うことができない状況もありました。
・限られた時間の中で、もう少し効率よく行うことができれば良かったのではないかと思います。

【C班】

・個々の意見を文章化することに苦労しました。
・グループとして意見をまとめることも大変でした。
・立てた企画案に対して、班員それぞれで受け止め方が同じでなく、共通の認識をもつまで時間を要しました。
・授業時間内では時間が足りないため、授業時間外でも相談していったが、そのスケジュールを調整するのが大変でした。
・班として意見がなかなかまとまらず、結論をまとめるのに大変時間がかかってしまいました。

担当教員からのコメント

昨年同様にコロナ禍で受講生の京都市京セラ美術館の総体的な把握までには至らなかった。また今年度は過年度より美術館・博物館に内容的、専門的に強い関心をもつ受講生が多く受講してくれたこともあり、ディスカッションは白熱していたようである。ただし議論が白熱した分、班ごとに意見をまとめて統一的な企画にまとめあげることにはずいぶん苦労していたようでもあった。

授業は3班構成で取り組んだ。本年度も各班とも関心の強い受講生がリーダーシップを発揮していた。各班の着眼点に応じて、試行錯誤しながら企画を取りまとめていたと思う。さらに美術館側の適切なアドバイスにより、各班の企画の課題を統一的な課題として共有することができ、コーディネーターとしての「連携支援母体」の設立という、実現にむけての組織作りまで到達したことは特筆すべきことであったと考える。

活動資料

1. 美術館（作家）×こども （担当：村瀬、蛭谷、前山、ﾓﾝﾊﾟﾙｺﾞﾝｻﾞﾚｽ、河口、三木）

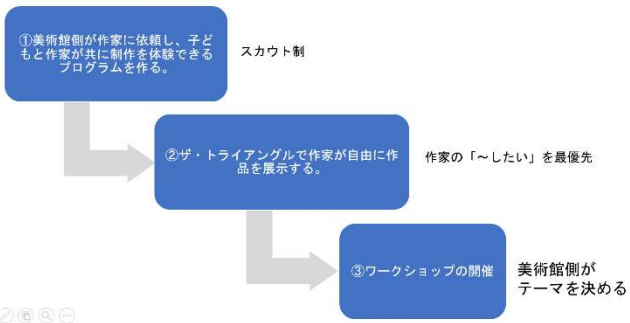
美術館（作家）×こども

作家とこどもにアプローチ
「ザ・トライアングル」を発展

ザ・トライアングル

作家 × 美術館 × 鑑賞者

・<企画>
①作家×こども　こどもが主体となって作家とともに作品制作をするワークショップ



企画の利点

・作家とこどもの交流、つながりができる
　→作家の<u>知名度</u>が上がる
　→作家と関わることができる<u>特別感</u>
・作品作りの楽しさを知る
　→<u>美術館や美術に触れるきっかけに</u>

美術館＝訪れやすいという認識をもつ
↓
継続的に訪れるきっかけになる

2. 美術館×大学生 （担当：福山、高田、長野、堀野、清水、渕川、水中）

美術館×大学生

ぽよよんタイムの拡充版「ぽよよんウィーク」

ぽよよんタイムとは

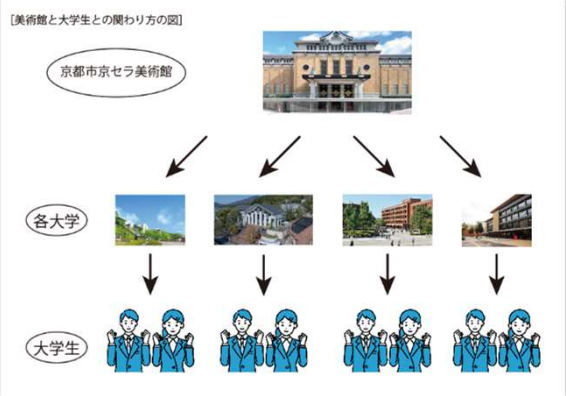
展示鑑賞後に来館者が職員との会話を通して、感想や疑問を共有することができる

「ぽよよんウィーク」

美術館職員＋大学生スタッフをコレクションルームに配置。

「美術館×大学生」

スタッフと作品を鑑賞しながら
会話できる空間をつくることで、
美術館での時間を楽しんでもらう。



3. 美術館×市民 （担当：古賀、浦辻、福嶋、村川、下口、松村、棚橋 ）

美術館×市民

市民がつくる美術館

市民ボランティアの活動内容

- 講座やセミナーの学芸員の補助
- 書類整理の雑務
- 美術館の内容や役割の説明などを行う施設案内

利点①

- 年齢問わず、募集を行うことで、様々な年齢層の地域住民の視点を取り入れることができる
- 市民参加に最も近い活動
- 市民のニーズの把握が可能になる

利点②

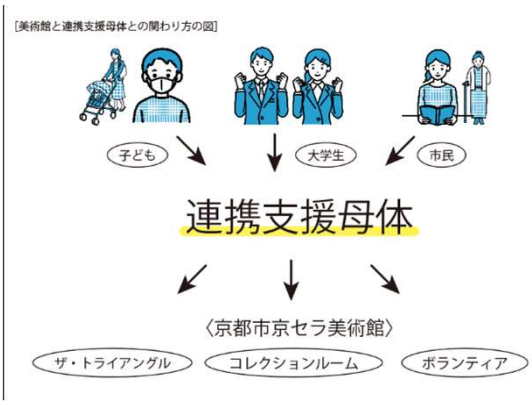
- 市民からの館全体の使用方法について、自発的な提案を行う場所が生まれる
- 美術館と市民の結びつきが強くなり、美術館の運営をより良いものにすることができる

4. 3企画の課題を解決し、実現するために

しかし…

美術館とこども・大学生・市民を円滑につなぐ必要性

「連携支援母体」の設立



①「美術館（作家）×こども」

主な役割

・作家への連絡
・スケジュール調整
・こどもへの広報

①前例　名古屋市教育委員会

「美術を楽しむプログラム」

作品を塗り絵に
→子どもの自由な発想。子どもたちが美術と親しむきっかけに

②「美術館×大学生」

主な役割

・「ぽよよんウィーク」の参加要項
・参加者の決定
・大学生・大学への広報

②前例　「MARO」（名古屋市博物館×名古屋市立大学）

イベントの企画・運営の取り組み

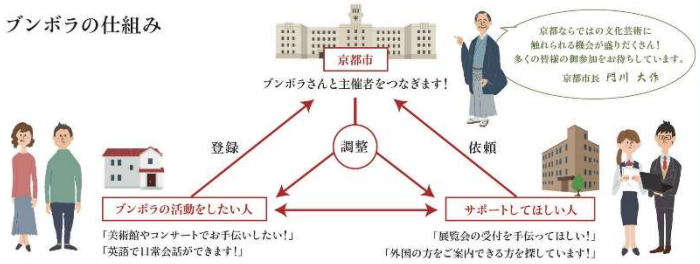
③「美術館×市民」

主な役割

・市民ボランティアの募集要項
・参加者の決定
・ボランティアの育成

③前例　「京都市文化ボランティア」

ブンボラの仕組み



・京都市：京都市文化ボランティア (kyoto.lg.jp)

③前例　「京都市文化ボランティア」

課題点

京都市文化ボランティアを活用しているが…
→市民が求めるような活動内容ができていない

③前例　「京都市文化ボランティア」

〈改善策〉

連携支援母体＝独立組織として活用
↓
美術館と直接的に関わる
↓
専属的なボランティアの育成＆市民のニーズに応える

大谷大学のアプローチ

連携支援母体の設立
↓

美術館（作家）×こども　美術館×大学生　美術館×市民

新しい認識へ

美術館
文化芸術活動の場を提供

市民
行ってみたい・やってみたい美術館を創る

新しい認識へ

あるだけではないアクティブな場
↓
幅広い年齢層の継続的な集客

新しい認識へ

他の生涯学習施設でも活用
↓
京都市京セラ美術館を先例に

京都市京セラ美術館から全国へ発展